

日本禅宗と病—中世曹洞宗を中心に—

横山龍顯

本発表においては、日本中世の禅宗が身体的・精神的な病に対して、どのように向き合っていたのかを、13～14世紀の曹洞宗に焦点を当てながら検討を行う。

日本中世の仏教と病に関する先行研究においては、貴族らの病悩への対処方法、典薬寮に所属する官医にかわって医療を施した医僧（時衆、禅宗、南都諸宗、密教の順に多いとされる）たちの活動、禅宗についてみれば、円爾（1202～1280）の門流である聖一派を中心に相伝された宋代医学の知識と治療技術、住持の健康管理を行う湯薬侍者や衆僧の治療を行う延寿堂から見た禅宗寺院における医療体制の実態、あるいは、学問的な興味関心から、桃源瑞仙（1430～1489）や月舟寿桂（1470～1533）などの五山禅僧が医学を深く学び、彼らの医学知識が抄物の講義を通して民間医へ接続されていく過程など、様々な視点から多くの成果が提出されている。

ただ、先行研究においては、曹洞宗僧侶が病についてどのように考え、対応していたのかについて言及されることはきわめて少なく、研究の余地が多分に残されているといえる。

本発表においては、中世曹洞宗の道元（1200～1253）を中心としながら、曹洞宗僧侶たちが、病や医療をどのように捉えていたのか、検討を行うこととしたい。具体的には、道元の著作（『典座教訓』『道元和尚広録』『吉祥山永平寺衆寮箴規』『日本国越前永平寺知事清規』『宝慶記』）、懐奘（1198～1280）による道元の説法の聞書とされる『正法眼蔵随聞記』、中世に編まれた道元伝（『永平寺三祖行業記』）、義介（1219～1309）によって記された道元の最後の様子（『御遺言記録』）などの記述を通して見出される、道元自身の病に対する態度、病に罹患した場合の対処方法、薬剤・薬効のある食品等への知識、病人に対する姿勢、そして、僧団運営における医療体制について考察を行っていく。そのうえで、道元の病・医療に対する姿勢が、曹洞宗の実質的な教団化を達成した瑩山紹瑾（1264～1325）において、いかに受容されたのかについても言及したい。

また、道元と活動時期の近い円爾を派祖とする聖一派における、宋代医学の受容や医僧の活動については研究の蓄積があるため、道元をはじめとする曹洞宗の僧侶たちの病・医療に対する視点が明らかになれば、中世における臨済・曹洞（あるいは後の五山・林下）のそれを比較考察するための足がかりになるとも考えられる。

〈キーワード〉 道元・教団運営・出家と在家